

2016 年度第 6 回物学研究会レポート

「ビジネスをデザインし、育てるということ」

孫 泰藏氏

(Mistletoe 社長兼 CEO)

2016 年 9 月 5 日

シリアル・アントレプレナー（連続起業家）である孫 泰藏さんは、東京大学在学中の1996年にYahoo! JAPANの立ち上げに参画したのを皮切りに、ガンホー・オンライン・エンターテイメントやMODIVA JAPAN、さらに現在はMistletoe(ミストウ)という共同創業の会社を経営されています。今回は、ビジネスのスタートアップからどのように企業をデザインして育てていくかという、最も興味深いテーマについて語っていただきます。

以下、サマリーです。

## 「ビジネスをデザインし、育てるということ」

### 孫 泰藏氏

(Mistletoe 社長兼 CEO)



01: 孫 泰藏氏

坂井 すでに皆さんは泰藏さんのご活躍についてはよくご存じかと思います。泰藏さんはシリコンバレーの華々しい立ち上げ期を経験されました。グローバルな視点と、尊敬する兄・孫正義さんとはまた異なる考えで始動されたと感じます。熱心に経営者を教育する、真摯なコーチングにも驚かされます。企業を規模だけで判断するのではないというお考えなど、いろいろと語っていただきたいと思います。では、よろしくお願ひします。

### ■兄・正義とジェリー・ヤン

皆さんに何を話したらお役に立てるか、いろいろと考えました。やはり私自身が今一番思っていること、考え続けているテーマやチャレンジをシェアさせていただくのがよいのではないかと思い、準備して参りました。

まず私自身を少しご紹介させていただきます。私の兄貴は孫 正義というソフトバンクの創業者です。男ばかりの4人兄弟で正義は次男、私とは15歳離れていて4男の末っ子です。父は戦後の混沌とした中で裸一貫から事業を始めました。兄も私も「父には敵わんね」と常々

口にするくらい起業家魂にあふれた人間です。

孫家には独立自尊という家訓があり、兄弟4人とも早くに独立し、父の跡は誰も継いでいません。兄貴にはものすごくこき使われます（笑）。電話で「今すぐ来い」と呼び出されて、なんとシリコンバレーまで自腹で飛行機を手配して向かったこともある。しかも途中で電話がきて「キャンセルになりました」。15歳も離れているので父親のような存在ですが、血が滲むような努力や研鑽を積んでいるのは見てきました。父や兄のようなことは自分には到底無理だと思っていました。そんな私の人生をガラッと変えたのが、ジェリー・ヤンというYahoo!の創業者との出会いです。

## ■未来のニュートンの前でリンゴを落とす

スタンフォード大学の大学院生だったジェリー・ヤンは、1994年、夏休みの自由研究として友人のデビッド・ファイロと世界で初めて検索エンジンをつくりあげました。

大学のドメインにサーバーを2台立てて、相撲ファンだったことからakebonoとkonishikiと名付けて、友人たちに知らせたのがYahoo!の始まりです。すると、これが便利だと口コミで広まってアクセスが殺到し、大学の回線がパンクしてしまっただけです。2人は大学に呼び出されてサーバーを移動させられますが、1.5メガの専用線が150万円もする時代で、回線を引くお金などありません。仕方なく大学から500メートルくらいケーブルを自宅まで引き込んで続けたら、また落ちてしまった。そんな困難な状況に遭遇したのに、なぜ続けたのかと彼に聞くと「人類のため。これから人類のありとあらゆる知恵や叡智はインターネット上のデジタル情報に掲載される。でもその欲しい情報をぱっと検索して目の前に出せなければ、存在しないのと同じだ」と言われました。

彼らはYahoo!とは「未来のニュートンの前でリンゴを落とす仕事だ」と説明します。

「泰蔵、想像してごらん。もしニュートンの前でリンゴが落ちてなかったら、今頃どうなっていると思う？」

「ニュートンは、万有引力の法則を思いつかなかったかもしれないね」

「そうだね、10年、100年先に誰かが見つけたかもしれないけれど。こんな物理学の基礎の確立が遅れていたら、今はまだ電気も発明されていないかもしれない。そう考えると、リンゴがあったことはものすごいことなんだよ」

と、25歳の彼に言われました。

その時22歳だった僕は大きなショックを受けて、人生で初めて興奮して眠れない一夜を過ごしました。

それから頼まれてもいなかったのにYahoo! JAPANを作る際の案をプレゼンして、「おお、いいね」と丸投げされ、始まったのです。

以来20年間で30以上のブランドや企業をゼロから作り、あるいは創業メンバーの一人として関わってきました。実は私の最大の自慢は、成功事例の倍くらい大失敗した事例を抱え

ているということ。「同年代で俺より失敗した奴はいない」というのが自信の拠り所です。

Facebook のマーク・ザッカーバーグ、Amazon のジェフ・ベゾスさんらと会うと「すごいな」と怯みがちですが、でも「俺のほうが大失敗しているので負けてねえ」という自信があるので、ぐぐっと話ができるのです。

## ■IoT 時代は街も暮らしもガラッと変わる

さて、未来はどうなるでしょうか。この 20 年間、インターネットの世界ではブロードバンド化やモバイル化が巻き起こり大きな変化がありましたが、冷静に見てこれからの 10 年の方がもの凄そうだと感じます。

インターネットは約 20 年前の 1995 年、大学の研究機関のネットワークから一般へと開放されました。Netscape などがその頃に生まれました。次のビッグウェーブは 2002 年で、ブロードバンド時代の幕開けです。web 2.0 と言われました。YouTube のような配信サービス、Facebook や Wikipedia などソーシャルなものが生まれました。その後の波は 2007 年に起き、スティーブ・ジョブズが iPhone を発表し、モバイルインターネットが主流になりました。

そして去年あたりが、次なるウェーブの年なのです。Internet of Things (IoT)、つまりスマホや PC だけでなく、あらゆるものがインターネットに接続される時代が始まりました。

IoT の実像は、私を含めてほとんどの人がまだよく掴めていません。そこで私たちが支援している会社からいくつかの事例を紹介しましょう。

かつて Danger を起業したジョー・ブリットは、アンドロイドというすばらしい OS を設計しました。しかし時期尚早だったため失速してしまい、Google の傘下に入ります。その後アンドロイドは急進し、今やスマートフォンの OS で世界シェア 1 位を占めています。Google は 3 年前に Android Everywhere という、スマートフォンのみならず、どこでもインターネットにつながる構想を発表しました。

その可能性があまりにも大きく、また Google 内ではなにかと窮屈なため、ブリットは会社を辞めて、Afero という自身の会社を立ち上げます。アンドロイドをさらに改良し、徹底的にローエナジーでコンパクトなチップと、そのためのソフトウェアとクラウドの 3 点をまとめあげました。

まだリリース前ですが、チップはわずか 2～3 ドル、200 円～300 円と極めて安い。これを既存の家電に付けると、いきなりスマート家電に早変わりします。

具体的には、まずコインランドリーで使用します。アメリカのコインランドリー市場は 5000 億円規模で、日本の映画 (3000 億) や音楽 (4000 億) 市場よりも大きいのです。

業務用の洗濯機や乾燥機は非常に頑丈に作られており、10 年に 1 度くらいしか切り替わり

ません。このチップならば既存の機械の蓋を開けて、配電盤にポチッと付けるだけで、完了です。アプリをDLすればスマートフォンから課金・決済ができ、「脱水中」などと状況が表示でき、何分後に取りにいけばよいとか混雑状況などが分かります。わずか数百円でできるのです。

彼は、オープンソースにして、できるだけ普及させたいと言っています。私はスマート家電の普及にはあと10年はかかると予測していましたが、どうも加速しそうな勢いです。

## ■起こりうる劇的な変化

ITやインターネットとありとあらゆるものがつながった時、暮らしや街の風景は大きく変化し、新しい価値が生み出されるでしょう。

例えば夏の帰宅時、家に近づいているのを察知してクーラーの自動電源が作動したり、部屋を住人に合わせて温度調整したりできます。このセンサーの応用を提案しているのがフィンランドの **enevo** という会社です。ゴミ箱にセンサーを付け、リアルタイムで収集車の状況を把握して、最適な回収ルートを見つけ出すのです。さらに1年間、天気や気温、イベントの有無などと合わせてデータを収集・解析すれば、何月何日は何時ごろゴミが満杯になるとか、予測できるようになります。さらに進化すると、各ゴミ箱の状況から判断し、最も無駄のないゴミ箱の位置を指定できるようになります。こうして、予測分析 (**predictive analysis**) により、徹底的にゴミ収集に関する無駄を排してコストを削減するだけでなく、最後には空になったら重油プラントに寄って空の荷台に重油を積んでお金をもらうことまで計画しています。

2～3ドルのチップを積み、そこにAIの需要を組み合わせるだけで劇的に生産性を上げられるようになるというのが、IoTの世界です。

## ■冷蔵庫を不要にするドローン

さらにインテリジェント化すると、ロボットの導入が進みます。私たちが応援している **Zipline** という会社では、ドローンによる自動運転をアフリカのルワンダで進めています。ルワンダは内戦により国土が荒れ果て、道路も補正されていません。病院も不足し、ユニセフや世界中から血液製剤やワクチンが送られているものの、冷蔵庫がないため大半が使われずに腐って終わるといった厳しい現実があります。

舗装されていない道路を車で行くと目的地まで4時間かかるところ、ドローンを使えばわずか15分で届けることができます。人工知能とカメラを積んでおり、荷物はパラシュートで落とします。**Google** や **Amazon** が物流ドローンの研究開発をしています。バッテリーはまだ弱点で、5キロ位までしか飛行できません。でも **Zipline** のドローンは150キロ、つまり片道70キロまで飛行可能です。その秘訣はグライダーと同様に、上昇気流を見つけて飛んでいるから。風がなくなったら止まり、また風を見つけて飛んでいくというのを自ら判断し、

鳥のように繰り返します。飛ばば飛ぶほど学習するので、さらに賢くなります。1回のコストは400円です。

2年前から実験し、この8月からルワンダで正式に配備されました。ルワンダは国土があまり広くないので基地が2つあれば、ほとんどの国土をカバーできるのです。

日常生活にも応用できます。スマホのアプリと連動し、ポチッと押したら目的地めがけて荷物を積んだドローンが飛んで来るのです。近づいて来たら僕の目の前で旋回し、ペロリーンと音が鳴ると「お届けに上がりました、サインをお願いします」と表示される。サインすると、僕の目の前に落ちてくる、という流れです。風がビュービュー吹いていても、ピタッと目の前に落とせるのです。

これを開発したのは、ハーバードで人工知能を学んだケラー・リナウドで、まだ29歳です。彼のビジョンは「病院から冷蔵庫をなくす」。注文したら15〜20分で必ず届くのですから、貯蔵する必要はなくなります。これは物量を劇的に変えてしまう可能性を秘めています。

アメリカでは空軍の規制などがあり許可が下りませんでした。一方、ルワンダは危機的な状況下にあり子どもがどんどん死んでいるので、一刻も早く導入したいと政府の後押しもあり、始まりました。でもルワンダでの実績により、アメリカでもまもなく飛べるようになります。日本では福岡で実験します。

皆で飲んでいて枝豆とビールが足りない時、ポチッとすれば、15分でドローンが届けてくれる。しかもほとんどコストがかからない。そんな時代が来るのです。

## ■移動にお金を払っていた時代を終わらせてみせる

「泰藏さん『マトリックス』っていう映画を観た？ あれに出てくる自動運転車を作っているんだ」と言ったのはZooxのティム・ケントレイ・クレイです。現在Googleなどが開発している自動運転車はレベル2で、高速道路を走行できるレベル。信号や歩行者がいても動けるのがレベル3で、彼らが目指しているのはレベル4。ハンドルもアクセルもブレーキも不要で、ただ乗るだけという自動運転車です。

前後がなく、タイヤも90度曲がる。16個のカメラとスキャナーで10秒間に200万回スキャンし画像で認識しながら進みます。僕も乗りましたが、50キロ位の速度で全く問題なく走れました。

彼はパロアルトというシリコンバレーの近くの出身なのですが、現在、その街の全て、葉っぱの一枚までを計測して再現した運行試験を行っています。人はもとより、バスや車などに人工知能を搭載して運行しています。現状ではビルに突っ込んだり人を轢いたりしていますが、一日に30万回走らせており、どんどん賢くなってきています。早ければ2020年には商業化したいと言っています。もうすぐです。

僕の試乗時にいきなり人がわっと飛び出したのですが、きちんと止まりました。僕の運転だったら轢いていたかもしれないほどです。ものすごい勢いで人工知能が進んでいることを目の当たりにしました。

彼らは「これは販売しないで公共交通に提供したい」と言います。ロボットタクシーを目指しているのです。タクシーの経費の8割が人件費です。人件費がなくなれば、残る2割は車内広告などで補って、タクシーを無料にできるかもしれない、と考えているのです。

「人類が移動にお金を払っていた時代を終わらせてみせる」と、過激なことを言っています。聞いていて怖くなるほどの変革が、5年かそこらで始まろうとしています。

1900年にニューヨークの五番街を撮った写真には、無数の馬車の中に1台だけT型フォードが映っています。その13年後、再び同じ場所で写真を撮ると、自動車の中に馬車が1台になっていました。インパクトのあるテクノロジーが生まれるときは、10年ほどでガラッと変わってしまうものなのです。

## ■雇用の80%がロボットに奪われる

そうした中で2040年の社会問題を考えたいと思います。大きな問題は2つあります。それは雇用と都市への過度な集中です。

人工知能の研究者は、先進国の雇用の80%はコンピュータやロボットに奪われるだろう、と言っています。大変なことです。昨年ハーバードビジネスレビューの論文にも、失業して収入のない人があふれることが今世紀の最大の課題となるだろうと書かれています。

数少ない雇用を求めて、都市に人が集中するでしょう。都市ではそれだけの人口を支えきれずに、治安の悪化やスラム化、格差社会が拡大していきます。フランス人の経済学者トマ・ピケティも『21世紀の資本』でどんどん格差が拡大すると書いています。彼は過去何百年分もの歴史資料から、労働者の賃金を調べ、金持ちは平均4.5%くらいの利回りがあるが労働者はずっと1.2%しかない、それが唯一逆転したのは、2度の戦争があった1910年～50年代だけだと指摘します。そして2100年まで、格差はますます広がっていくと予測しています。人工知能とロボットの発達により、それを活用する資産家は儲かり、労働者は働き口を失うからです。

もはや20世紀型の産業や社会的モデルは、経済の面でも環境の面でも成り立たなくなっており、21世紀型モデルの構築が必要です。どうすればよいのか、僕は糸口を考えています。

## ■新しいメガネならば地球がリビングになる

人間がする仕事は減り、さきほどの運転手の仕事のような労働のほかに、弁護士など学歴が必要だった仕事が真っ先になくなるだろうと予測されています。政府はワークシェアリン

グを推奨しますが、ひとつの仕事を複数人で分担するのですから収入は減ってしまいます。どうしたらいいのか2～3年考えました。

僕の結論は、コストを劇的に減らせればよい、ということです。生活における支出を劇的に減らすことができれば、可処分所得を同じ水準に保てます。

では、どうしたら劇的に減らせるのでしょうか。日本の一般的な家計の支出を見ると、住まいと移動（車）にまつわるコストが大きいのです。先ほどの話のように、人類が移動するのにお金がかからなくなったら、自家用車も不要になり、駐車場も自動車保険もなくなります。2050年には「昔の人は自分で運転しないといけなかったらしいよ、大変だったらしいよ」と言われる時代になると思うんです。かつては馬で移動し、馬の世話までしなければならなかったのと同じです。

同様に、「昔の人は土地にお金を払っていたらしいよ」という未来もありえると想像します。オランダ人デザイナーらが作った繭のような「エコカプセル」(Ecocapsule)は、太陽光のパネルとセンサーが付いたスマートハウスで、価格は8万ドルです。こんなカプセルホテルみたいところで暮らす時代が来るかと思うと拒否したくなるかもしれませんが、これは発想を変えませんかという提案です。20世紀的な3つのベッドルームにプールやホームシアターがあるラグジュアリーではなく、このカプセルを持って行けば、スキーが趣味ならグレンデに横付けしたり、夏の満天の星空の下で過ごしたり、海に行ったり、要するに地球がリビングになるという発想に変えませんか、という提案なのです。

古いメガネで見ると狭くて嫌だけど、新しいメガネで見てみると土地に縛られずに生きるのは自由に見える。マインドセットを変えませんか、ということなのです。

## ■徒歩の感覚が拡張されるモビリティ

これらコンセプトな提案は、単発だけでもイノベーティブですが、それらを組み合わせること—私たちはオーケストレーションと呼んでいます—が、それにより社会に大きなインパクトを与えることができます。

例えば、頑丈で規格が世界で統一されているコンテナを用いて、これにソーラーや水の循環システムを組みあわせ、新しいコミュニティをつくるということを考えています。商業施設をはじめ、災害時はボランティアが集まるセンターになります。避難所という暗くなりがちな概念をリデザインして、新しいポップアップサイトへと変換するのです。楽しい空間にするためのテクノロジー効果です。

都市の平日では、物流の70%を占めているのがトラックだそうです。社内では「トラックっているんだっけ？」と話し合いました。オフィスもダンボール一個単位のカートが地下を自動運転で動き回ればすむことです。物流は地下、地上は人間が移動するとしたら、20世紀にできた道路や駅のある都市から、新しいテクノロジーに合った形で再設計してみる必要があるでしょう。



パーソナルモビリティという分野も出始めています。筑波大の学生が、かばんに入る自動車というものを開発しています。センサーを搭載しているので、シャーっと自由自在に動きたい方向に行けるんです。しかも非常に軽い。コルクが強いモーターを使っているので、距離にして4キロ走行できます。日本の道路交通法の規定で時速6キロ以下にしなければなりません、すでに20キロ出るのが分かっています。

「パーソナルモビリティを試乗していると、距離に対する感覚が変わります」、と彼らは言うのです。例えば西麻布から赤坂見附に行く時、皆さんはタクシーに乗りますよね。でも、これに乗ればさっと行けてしまう。だから徒歩の感覚が拡張されるらしい。そんなものを当たり前前に使うようになった時に、道路のデザインはどうしたらいいのか。こういうことをゼロベースからやれる自治体や企業に働きかけています。

## ■人間に残された3つの仕事

AIやロボットが普及した時代に人間に残された仕事は、3種類くらいと思っています。1つは「スマート・クリエイティブ (smart creative)」。世界を劇的に変えてしまうようなすごいテクノロジーイノベーションを生み出す仕事です。もしくはクリエイターやアーティストと呼ばれる人たちが担う仕事です。その世界は人工知能では対応できません。

2つ目が「地域社会型ビジネス (community-scale business)」。地域のコミュニティの人たちの満足度や、コミュニティに資することを最大のミッションとする仕事です。例えば静岡でお茶を作っている農家さんのお茶摘みに最適化された軽トラックを開発するといった、ローカルの細かいスペックに特化した、ヒューマンタッチなサービスがあります。

3つ目が「市民的社会参加 (civic engagement)」。これはボランタリーなもので、相対的にお金の量が減っていくと予想される中で、金銭のやり取りではうまくやり取りできなかったサービスなどをクリプトカレンシー（暗号通貨）で価値交換する仕事です。

この3種類が人間のすべき仕事になると思っています。中途半端なグローバルチェーンやチェーンストアなどはこの3種に喰われてしまうでしょう。コミュニティにピッタリ寄り添った細かなサービスができる人と比べると、グローバルチェーンは標準化されすぎてつまらないもの。大量生産の大量消費型の業態は、おそらく解体されていくでしょう。

こうした未来に向けて私たちは、テクノロジーと新しいアイデアを組み合わせることで社会に大きなインパクトを与えていくことを目指しています。出資もし、研究開発もし、形にはこだわらずに常にみんなで作っていきましょうという考えです。

## ■どこにでも好きな場所に住める未来へ

AIとIoTの力で、解決できることはまだまだ多く残されています。賞味期限切れで廃棄されるコンビニ弁当は、1年で1800万トンあります。とてつもない量ですが、マッチングさ

れてないことが原因なのです。需要と供給がマッチしていれば、社会的に弱者の人たちも救えるコミュニティの実現も夢ではないと考えます。

世界の水不足を解消するために、私たちが東大生ベンチャーと進めている水の循環システム「HOTARU」を紹介しましょう。日本は現在、上下水道水を巨大なインフラで維持していますが、浄化システムを転換して小さな循環を実現させる試みです。日本の高性能フィルターの技術はすばらしく、どんな汚い水でも純粋の水にすることができるほどですが、汚れで目詰まりしてしまい、すぐにフィルターを交換しなければなりません。高価な高性能フィルターを長持ちさせるために、濾過する前のタンクにバクテリアを入れるのです。彼らにとって汚水は養分。パクパク汚れを食べてくれるので、水はかなりきれいになります。それからフィルターに通すと、従来1～2週間で目詰りしていたところ、1年ほど保つようになりました。

アメリカの砂漠に5万人が集まる「バーニングマン」というイベントでシャワーシステムとして導入しました。アメリカでは4人家族で平均1カ月にシャワーの水を1600リットル使用していますが、HOTARUを導入すれば20リットルあれば延々と使い続けられるのです。

その他、間伐材でつくった足場でオフィスを組み立てたり、超低価格の水に浮く電気自動車や、倉庫で用いるロボットカート、トイレに設置するセンサーでがんを未病の段階で検知したり……AIとIoTを組みあわせたいろいろな分野を手掛けています。

ライフラインを確保し、医療、教育、仕事の需給のミスマッチを解消することができれば、どこでも好きなところに住める「Living Anywhere」という世界を実現できると考えています。

## Q&A

関 どうもありがとうございます。では質問のある方、どうぞ。

**Q1:** ボランタリーな社会へ、経済はどのように変わっていくのでしょうか。

**A:** 市民参加型のコミュニティにおけるクリプトカレンシーを実験的に行っているのですが、そこでは YEN ではなく ZEN という通貨が流通しています。従来型の雇用形態では雇えなかった、例えばお婆さんが地域の子どもの面倒みてご飯をつくるという行為に対し ZEN で支払い、お婆さんは ZEN でコミュニティ内の鍼灸院に通うといった、社会貢献をすることで生じる価値交換モデルです。このシステムでは契約自体がデータになっている点が画期的です。工事予算が膨らんで発注者と受注者の見積もりにずれが生じることはよくありますが、このシステムはリアルタイムで決算するようなものなので、状況に応じて契約を変更し、適切な内容へ修正することができるのです。コンビニで余分な在庫を抱えるようなこともなくなるでしょう。無駄がなくなるのでよいデフレがおこります。こういうデフレは歓迎すべきことです。

ビジネス寄りの話でいうと、現在でも変化が速すぎるので、シリコンバレーでもどこでも、事業計画など一切見ませんし、仕様書も書いた瞬間から変わってくるので作りません。予算もない。ではどうやってうまくいかせるのかというと、メガトレンドの流れに乗る、半直感的なものとししかいいようがない。

シリコンバレーの経験則に面白いものがあります。パートナーを多数決で決める投資会があるんですが、全員がいいねと言った相手先には投資しないという経験則です。目が肥えた人たちばかり、全員がいいと言ったのに。なぜならインパクトがないからです。でも物議をかもす、賛否両論で、その喧嘩っぷりが激しいものほどうまくいきます。民泊システムの Airbnb も Twitter も Instagram もそうでした。だから半直感的なんですね。

「いけそう」と思うやつが駄目で、「わけが分からん」というものがうまくいっている。皆がいいと言ったものは論理的で、だから真似されやすいし同じようなことを考えている人もいる。物議をかもすものには論理から飛躍した何かがある。だから「わけが分からんから面白そう」「使ってみよう」となり、ソーシャルネットワークで伝わっていく。事例が増えるとブラッシュアップされてどんどん進化していく。そうするとさらに話題になり、気がつけばホテルを借りるのが馬鹿らしくなるほど、安くて素晴らしい体験が民泊で得られるシステムとなっていた。Airbnb はベンチャーキャピタル 100 社に出資を断られた。でも今の時価総額は 4 兆円といわれています。儲かる、儲からないという次元じゃないところを起点にして一気にいくんです。完全なるアーティスティックな世界です。

**Q2:** 黒川 あらゆるものが大激変している今、どのようにこの先の社会を読んだらいいのでしょうか。

**A:** 究極の問いですね。私も一生懸命に読もうとしましたが、分かりません。パーソナルコンピュータの父と称されるアラン・ケイさんいわく「読もうとしないということ」。どんな未来を作りたいかを発明し、みんながそれをいいと思ってくれると本当にそういう社会になるということです。

実際に投資先も「俺はこいつに賭けたい」と思うかどうかが決め手です。「こいつと一緒に創りだそうとしている未来はいい未来じゃん」、って多くの人が共感してくれることが未来を創るのだと思います。

黒川 これまでのキリスト教の世界観から離れ、東アジアや東欧の神秘思想のようなものに未来は回帰するんじゃないかと思います。

孫 私も、西洋の考え方は煮詰まっていると思います。ある歴史家が言っていましたが、「文明の真髄はそれが発祥した場所よりも一番端っこの周辺に色濃く残る」。日本には、大陸由来の文化が色濃く残り、それがわび・さびや、引き算の美学、禅的なものとして受け継がれている。そうした美意識やセンスに、日本の成熟したテクノロジーやエンジニアリングが融合した時に、日本人は世界に貢献できることが、めちゃくちゃいっぱいあると感じています。むしろしなきゃいけないと思っています。できるんだから。だから僕らもがんばって外に出て行き、いいものをどんどん伝えて作り、世に広めていきたいと強く思っています。

黒川 とても勇気付けられますね。ありがとうございました。

以上

2016 年度第 6 回物学研究会レポート  
「ビジネスをデザインし、育てるということ」

孫 泰藏氏

(Mistletoe 社長兼 CEO)

---

写真・図版提供

01 ; 物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2016 BUTSUGAKU Research Institute.